
退屈じゃない日々

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退屈じゃない日々

【Zマーク】

Z9728D

【作者名】

春崎やよい

【あらすじ】

服部たちがやってきたー服部が来た理由とは、親戚の子にあげるための玩具を買ってくることだった。コナンは、少年探偵団を呼び、一緒に買つことになった。それでも、コナンには、大変な日々が続くのであった。ほぼオールキャラです。ドタバタコメディー！ご覧あれ！

その壱

私、毛利蘭。

お父さんが探偵で、お母さんが弁護士なんだ。
そして、幼馴染の新一も探偵。

園子は、たまにお父さんと同じように推理クイーンになるの。
服部君も、新一同様探偵。

あ、そうそう。

一緒に暮らしているコナン君も探偵なんだ。

そうして、歩美ちゃんたちがやっている少年探偵団。
コナン君もその中の一人なの。

少年探偵団は、五人で構成されているの。

団長の小嶋元太くん、円谷光彦くん、吉田歩美ちゃん、江戸川コナ
ン君、そして、灰原哀ちゃん。
子供なのにすごいと思つのよ。

私？

私は、空手会の女王よ。

とりえは、それくらいしかないから
でも、お化けが嫌い。
だつて、怖いんだもん。

時々、空手で犯人を捕まえることもしばしば。

私が得意な回し蹴りで一発！
それで、犯人は、伸びるんだ。

自己紹介は、これくらいかな。

じや、話を進めていくわね。

その壱（後書き）

まずは、蘭の一人称のお話。
これから、楽しくなります！

その武

新一がいなくなつてから、三ヶ月。たまに電話を掛けてきたと思つたら、何処にいるのかは、教えてくれない。

「早く帰つてきなさいよー！」

『いつもののいつ帰つてくるのか、判らない。
それでも、私は、待ち続けます。あなたを

朝も早いことだつた。今日は、土曜日。

こんな時間に電話が来るのは、思つても見なかつたことだから

「」「」「」

「はい、毛利探偵事務所です」

『蘭ちゃん?』

『和葉ちゃん!久しぶり!びうしたの?』

『いきなりで悪いけど、東京駅に迎えに来てほしいんや!今、こっちに来ているんや』

『そつなんだ。わかつた。今から、行くね』

私は、電話を切り、出る度をした。

そうだ!

一応、置手紙書いておかないと

私は、電話であつたことを手紙に書いた。

よし!

事務所を出て、東京駅に向かつた。

東京駅には、和葉ちゃんと服部君の一人がいた。

和葉ちゃんは、私に気がついて、手を振つていてるのが見えた。

私もそれに振り替えます。

「蘭ちゃん！こっちや」

私は、一人の前に来た。

「和葉ちゃん、服部君、おはよー」

「おはよー」

「口口口口ナーン君はどうないした？」

服部君が聞いてきた。

「私一人だけだよ？まだ、お父さんたち起きていないなかつたから、私は一人出来たんだ」

私は、服部君に言った。

それにして、なんでどもるんだねー？
コナンなんて、すぐに言えるはずなのに
そのことは、触れずにいた。

「探偵事務所に行こうか。朝」はんまだでしょ？」

「そりなんや。急いできたから、食べてないんや
服部君が笑つて答えてくれた。

「行こうか」

私は、和葉ちゃんと並んで、服部君は、後ろに着いてきた。
自然とそつな。

私は、和葉ちゃんと服部君を連れて、帰つて來た。
事務所に入ると、お父さんがいた。

「蘭か。お帰り」

「ただいま」

「お邪魔しまーす」

私が入ると、後から和葉ちゃん、服部君が入つてきた。

「服部、貴様。なんで、朝早くに来る？」

お父さんは、いやそうな顔をしていた。

「たまには、ええやんけ！」

服部君は、笑つていた。

私は、食事の用意をするため、台所に行つた。

七時半にコナン君が起きてきた。

「コナン君が事務所に来た。

「コナン君、おはよう」

和葉ちゃんが挨拶しているのが聞こえた。

「うん、おはよう。平次兄ちゃん、来て！」

コナン君は、事務所の外に服部君を連れ出した。

私が聞いていたのは、此処まで。一人が外で何を話していたかは、判らない。

十分くらいで、二人は、戻ってきた。
何を話していたかは、想像つかない。

私は、「ご飯が出来たから、コナン君に『早く着替えてきなさい』」って、言つた。

コナン君は、「うん」と頷いて、部屋に戻つて、着替えに行つた。

コナン君が戻つてきたのは、五分経つたくらいだった。
結構、早い着替え。

服部君たちと一緒に朝ご飯を食べた。

朝ごはんを食べ終わつて、食器を運んだ。

和葉ちゃんが「手伝つてあげる」と言つ申し出を受け入れた。
私が洗い、和葉ちゃんが拭く、その動作を繰り返した。

「和葉ちゃん、この後どうする？お買い物行く？」

「そうやな～。今回は、平次の依頼について来ただけやし～。」

和葉ちゃんは、そういうつていた。

服部君、仕事なんだ。

だから、和葉ちゃん、東京に着たんだ。私に会うために

私は、嬉しかつた。自然と笑つていた。

「あははは！」

「蘭ちゃん？」

和葉ちゃんは、どうしたの？と声を掛けてくれた。
和葉ちゃんに悪いと思ったが、笑いが止まらなかつた。
笑い終わり和葉ちゃんに「ごめんね」と謝つた。

「でも、急にどうしたん？」

「嬉しくって。服部くんの仕事について来た和葉ちゃんが私に会え
るって思つてきたことがすぐ嬉しくてね。そつしたら、いつの間
にか、笑つていたんだ」

和葉ちゃんは、顔を赤くしていた。

本当に服部君のことが好きなんだなつて、羨ましかつた。

私も新一のそばにいれば、どんなにいいことか。

早く帰つてきてよ、新一

私は、心からそう願い続けた。

「片付けも終わつたし、みんなのところに行ひつか

「そうやね」

和葉ちゃんは、いつも和葉ちゃんに戻つていた。

私たちは、探偵事務所に戻つた。

その式（後書き）

蘭の一人称の始まりました。

服部が東京に来たわけとは・・・

次回作読んでください。

そこで、明かされるわけですが・・・

評価のほう、宜しくお願いしますね。

俺は、江戸川コナン。探偵だ。

朝早くに蘭が事務所を出て行く気配がした。

どうしてかは、知らない。きっと、電話と話していた誰かに呼び出されたんだろう。

まあ、こうこうときは、あいつだらうけど

俺は、毛利探偵事務所に居候している身分だ。今は元は、工藤新一っていう姿だったんだが、ジンって、やつに妙な薬を飲まされてこんな姿になってしまった。

その薬を開発したやつがショリーー」と、宮野志保。今は、灰原哀として、阿笠博士の家に住んでいる。

そいつは、姉の明美さんがジンに殺されて、嫌気が差し、対抗して逃げつて来たつてわけだ。

まあ、俺は、灰原のことば、信じている。

話を戻して

俺は、もう一眠つすることにした。

次に起きたとき、蘭が帰つてきていることに気がついた。おつかやんもいなかつた。

たぶん、下にいるんだろう。

俺は、下にある探偵事務所に一回顔を出した。

やつぱりいた。

服部お前だったのか、蘭に電話をして、呼び出したのは

つたく、お前には、呆れるよ。

和葉さんが挨拶していたので、俺も挨拶をする。

「コナン君、おはよっ」

「おはよっ

俺は、迷わず服部を引っ張り出した。

事務所の外に出てきた。

「なんや？」「藤

一人きりになると、ここからは、俺のことを「藤」と呼ぶ。

「お前、いきなり来るなって言っているだろ？」「アポ取つてから、来いよ！」

「すまん。いきなり、母ちゃんに言われたんや。親戚の子に渡さないといけないものやから、東京に行つて、同じもん買いに行けって！まあ、和葉には、事件やからといつてあるけどな」

なんだ、そんなことかよ。

早く買つて、帰れってんだ。

服部と話すことが無くなつたから、事務所に戻ることにした。事務所に戻るなり、蘭に「早く着替えてきなさい」と言われた。ご飯が出来たんだつて、わかつたんで、素直に「うん」と頷いて、二階に上がつていった。

すばやく、着替え、下に降りていった。

ご飯の用意がしてあつた。

いつもの場所に座り、食べ始めた。

蘭の手料理は、どれも美味しいから、黙つて食つ。

食べ終わり、蘭たちは、片づけをするため台所に行つた。

俺は、服部と話をすることにした。

「服部、さつき行つていたよな？ 買い物があるつて。その買い物つて、なんだよ？」

「それか。玩具や！ 親戚と言つても、子供にあげるものやし、なんでもいいとちやう？」

呆れてものもいえねえ。

子供に玩具をあげるために東京に行かされたんじゃ、ただの暇つぶしとしかいえねえよ。

和葉さんも可哀相だな。

あ、そんなことないか。蘭がいるし、退屈しない

「そこでコナン君！ なあ、子供にあげるんやつたら、何がいい？」

「そういう事は、俺に聞くな。」

「だつて、お前今、子供やし。お前に聞くのが一番かよて、きたんやで？ おして～な！」

あー、うぜー！

知るかよ！ そんなこと！

「子供は、他にもいるじやねえか！」

俺は、怒りに任せて、服部に言った。

でも、それが逆効果になるとは、夢にも思わなかつた。

「そいや！ 少年探偵団に聞けばええやんけ！」

げつ！ マジかよ

休日にはいつも会いたくないことは、明白だつた。

「コナン君、頼むわ～。連絡してくれへんか？」

きたー！ ゼットー、言ひと思つた。

「しょうがねえな。判つたよ。あいつらに言つておぐ。聞くの忘れていたけど。お前ら、こつまでいるんだ？ 買つたら、すぐ帰らないといけないよな

「いつでも、ええって。それに玩具は、送つておけって言われた。なんじやそりゃー！ 玩具、送るかふつー？ 頭が痛くなりそうだつた。

「だから、まだ此処に当分いるわ！」

「そつか

俺は、それだけ言つて、横になつた。

服部のことは、極力考へないようにした。

まさか、それがトラブルを運ぶとも、思はず

その参（後書き）

コナン一人称です。

服部が東京に来た理由は、親戚の子にあげる玩具を買いにきたのでした。

評価お願いしますね。

次回は、べいかデパートでお買い物です。

少年探偵団が出てきます。灰原も

その四

といひかわつて、此処は、べいかデパート。

俺と服部は、二人でお買い物に来た。

もちろん、このことは、蘭たちに言つてある。

和葉さんを騙していたことをちゃんと、服部に言わせた。事件なんて、ないことも

「つたく、お前には、呆れるぜー！」

俺は、服部に目を向けた。

「すまんなー、工藤」

「それと、歩美たちの前では、工藤は、ダメだぞ！」

「分かつていいちゅうに」

服部と話しているときに歩美・光彦・元太・灰原が来た。なぜ、灰原を呼んだかと言うと、暇そつだつたから。

それにたまには、家から連れ出したほうがいいと思ったから。いつも、家の中にいるよりは、外に出たほうがいいと

「服部にお兄さんだ！おはよー！」

「おはよー！」

歩美と服部が挨拶していた。

「なんですか？僕たちを呼び出して」

光彦が俺に聞いていた。

「いやや、親戚にあげる玩具に協力して欲しくて」

「そういうことか！よおし、張り切るぞ」

元太がおーーと一緒に手を上げていうと、歩美たちも後に続いておーーと手を上げた。

はは、付いてけねえわ

そんなこんなで、おもちゃを買いに行くことに決まった。

玩具売り場に着た俺たち一行は、元太・歩美・光彦を先頭にして、

歩いていた。

「玩具を買うんでしたら、親戚の子は、何歳なんですか？」

「七歳や。ちよつど、お前らと一緒にやで！」

「でしたら、人気のヒーロー仮面ライバーがいいですよ！子供たちの間では、人気なんですか？」

光彦が言った。

なんでも、いいから早く買って帰ろうぜ！

俺は、協力する気なんて、なかつた。

服部は、光彦に言われて、仮面ライバーの玩具を手にして、レジに行つた。

「あら？ 面白くないの？」

灰原だ。

「そうだよ。だいたいなあ、服部が急に来て、こんなことになつたんだからな」

「そうね。それでも、結構面白いじゃないのー。ちよつどいいわ。私も欲しいものがあつたから、買つてくるわね」

灰原は、そう言って行つた。

なんなんだ？ あいつまで

それにしても、買うものって？

「ねえ、コナン君。哀ちゃんは？」

「買い物だつて言つて行つたよ。」

「そつか。哀ちゃんが何処に行つたか知らない？」

「たぶん、アイツのことだし、服を買いに行つたんじやねえのか？」

俺は、歩美に言った。

そうしたら、歩美は、「そうだね」と頷いた。

服部が買い終わつて、暫くその場で待つていたら、灰原が戻つてきた。

「何、買つていたんだ？」

「薬品よ。補充しておかないとね

服じゃなかつたのかー！

それにしても、薬品つて。

こんなところで、そんなもの売つている店あるのかー！

突つ込みたい衝動に駆られたが、黙つていた。

「何はなしているの？」

どうやら、今の会話は、聞こえてなかつたみたいだな。良かつたぜ！

「みんな買いたいもの買つたみたいだし、帰ろう！」

俺は、そう言つてエスカレーターに向かつて歩き出した。でも、誰も俺の後についてくれない。

どうしてだー！

「どうしたんや？くゞ・・やのうて、コナン君？」

俺は、早く帰りたいんだー！

「俺は、早く帰りたいだけなんだ！俺は、帰るからな！」

俺の体が浮いた

なんだ？

「こいつがどうなつてもいいのか？」

何がどうなつてているのか、分からぬ。

上を見上げてみると、覆面した男が俺を抱えていた。しかも、拳銃をこめかみに当てて！

なんだ、警察から逃げてきて、俺を人質に取つたのか。つて、分析している場合じゃない！

俺は、こいつから逃げるため拳銃を持つてゐる手に被りついた。今は、こうして逃げるしかねえ。

思つたとおり、手にかぶりついたら、俺を放した。

そいつから離れ、靴についているダイヤルを回し、サッカー・ボールを出して、そいつの頭にサッカーを蹴つた。失神して、倒れた。警察は、男を取り押されて、逮捕した。

「さすがコナン君です！」

ふう、なんとか、収まつたな。

コナンたちは、べいかデパートから出て帰つていつた。

その四（後書き）

べいかデパートで、玩具を買いました。

そして、灰原も薬品を！なぜか、買わせたかった。

コナンの突つ込み、いいですね。

いや、愉快愉快！

コナンが人質に。でも、逆に犯人を捕まえた。

やっぱり、コナンですね。

次回は、未来です。

タイムスリップします。

それでは、次回お会いしましょう！

その五

次日の日に服部たちは、いなかつた。

これで、もう何も起こらねえな。

俺は、ふうとため息をついた。

それからと云つもの、コナンは、よく外に出るようになつた。

ある日、俺は、見てしまったんだ。

赤ちゃんが町を歩いているのを

「リボーン！ 待てよ」

「ツナ、来い！」

「十代目！」

ん？

コナンが見たのは、ジャンプで出ているリボーンとつな、獄寺だつた。

なんで、あいつらがいるんだ？

歩いていると、後ろから誰かが走ってきた。

「ランボさんのものだもんね！」

ランボは、コナンにぶつかつた衝動で、後ろに倒れた。

ランボの頭から、十年バズーカが出ていた。

コナンは、それを頭から引き抜いた。

まじまじと見ていると、ランボが「それ、俺の！返せ！」と言ひ出した。

「返すよ」

コナンは、ランボに返した。ランボのまえから去つた。

歩いていると、空から何かが降ってきた。

さつき、返したはずの十年バズーカがコナンを覆つた。

ボンと音を立てて、コナンは、消えた。

コナンは、なんと未来に送られてしまった。

此処で説明しよう！

十年バズーカに入つたものは、五分間だけ、未来と過去を変わることが出来るのだ！

未来のコナンは、もちろん新一。そう、新一は、現代に来た！もくもくと煙が立ち込めていた。

新一は、周りをきょろきょろ見ていた。

此処が何処だかわかると、灰原のところに行つた。

あいつに言わなきやならねえ事がある！

阿笠邸に来た新一は、玄関のドアをバンと音を立てて、入つてきた。リビングに灰原は、いた。

新一は、灰原に近寄つた。

「あら？ 工藤君、元の姿に戻れたのね」

「灰原、伝えておく！ 今すぐ、此処から逃げろ！ 組織が来る！」

それだけ、言つて新一は、消えた。変わりにコナンがそこにいた。

「あれ？ なんで、俺此処にいるんだ？」

周りを見れば、博士の家。

何が起こつたかのか、判らない。

灰原も急にあわられたコナンにびっくりしてはいた。

「工藤くん、元の姿に戻つたんじゃないの？」

「何言つているんだ？ コナンのまんまだぞ」

未来に行つていたコナンは、森にいた。

そこには、誰一人もいなかつた。ただ、棺おけがあつただけ。

その棺おけは、歩美・元太・光彦のもの

その五（後書き）

未来と言つより、未来のコナンしんいちが現代に来たと言つ形になりました。そうして、未来では、何があつたのか？歩美・元太・光彦の棺ひつありました。三人は、どうして死んでしまつたのか。次回、お送りします。

その六（前書き）

- ・コナンは、ランボの十年バズーカによつて、十年後の世界に飛んだ！
- ・未来に来たコナンは、森に来た。そこには、三つの棺おけがあり・・
- ・なんと、その棺おけは、歩美・元太・光彦のものだった。
- ・コナンは、必死に考へるのであつた

その六

現代に戻つてきたコナンは、阿笠邸にいた。
未来のコナンしんいちが灰原に伝えに来た。

『此処から逃げろ！組織のやつらが来る！』

どういうことだ？未来の俺が灰原のところに来たんだ？
さつき、灰原から此処に新一コナンが来た事を聞かされて、コナンは、考
えていた。

「で？工藤君は、これからどうするの？」

灰原が言つ。

「あの子に会つてくる！」

コナンは、そう言つて、阿笠邸を飛び出した。

「待ちなさい！つたくもつ。知らないわよ」

灰原は、ソファの上で、コーヒーを啜つていた。
香氣なもんだ。

コナンは、ランボを探していた。

何処にもいない。

店の前で、ツナがいた。彼だったら、知つているかもしれないと思
い、コナンは、聴いた。

「すいません、バズーカを持つている子知りませんか？」

「バズーカ？十年バズーカだったら、知つているよ。」

「僕、変なバズーカで、未来に行つたんだ。」

ツナは、まさかと思った。

まさにその通り！

そこにランボが来た。

「こら！ランボ、他の人を未来に送っちゃダメだろ！？」

「ランボさんのせいじゃないもんね！」

「つたくもう！すいませんでした！」

ツナは、コナンに謝った。

けれど、コナンは、未来で何があったのかを知りたくて、ツナに頼んだ。

「そんなことより、知りたいんだ！ 未来の僕の仲間が死んだのを！ お願い！」

ツナは、おろおろしていた。

「お願いされても・・・」

これだけは、なんともならない。

そこに獄寺が来た。

「十代目どうしましたか？」

「獄寺くん！ ちょっと、面倒なことになっちゃって・・・」

ツナは、獄寺に今、あつたことを話した。

「そうでしたか。コナン君と言つたね。君、未来のことを知つて、どうするんだ？」

「早いときには作戦を立てたいんだ。灰原のためにもー。」
獄寺は、腕を組んで、悩んでいた。

「それは、できない。君自身で、やるしかないんだ。それにいつ襲つてくるのかも、わからなんじやな」

コナンは、うつむいた。

（どうすることも出来ないのか）

コナンは、獄寺に顔を向けた。

「判りました。」

コナンは、それだけいい去つていった。

「（これからは、俺たち組織の対決だ！）」

コナンは、これから組織の対決作を練るのだった。

その六（後書き）

ちょっと、難しくなつてしまつました。
この話は、これで完結です。
コナンの行く末、別の話でやうひと思っています。
評価のほうをお願いしますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9728d/>

退屈じゃない日々

2010年10月11日14時19分発行